



ASSITEJ Japan Center

題字：栗原一登

No. 113 (2011.4)

国際児童青少年演劇協会  
日本センター  
〈略称・アシテジ〉

〒102-0085

東京都千代田区六番町13-4

浅松ビル2A

T E L 03 (5212) 4773

F A X 03 (5212) 4772

Mail: centre@assitej-japan.jp

Web: http://www.assitej-japan.jp/

発行者 アシテジ日本センター

# 第17回「アシテジ世界大会」

## ●デンマーク・スウェーデン

●5月20日～29日

第17回「アシテジ世界大会」が、デンマークのコペンハーゲンとスウェーデンのマルメで、5月20日～29日に開かれる。

日本からは、「トラベルキャッツ」扱いで65名、その他を合わせると約100名程度の参加が見込まれる(団長・内木文英)。

「世界大会」は主に「会議」部門と「フェスティバル」部門に分けられる。

「会議」部門のメインは何と云っても、各種の選挙である。

理事、事務局長、財務、副会長、会長、そして次回開催国と選挙が続く。「会議」というのも選挙で終始する感である。

メインは理事選挙。理事に当選するか否かは、各国にとって死活問題。理事に当選したからといって、全く政府の助成と関係ないのは日本くらい。各国にとつては、助成金の問題等々、深い影響があるのだ。

したがって、日本以外の各国は、涙ぐましい選挙活動、目にあまるようなロビー外交を展開している。

この度、日本から3年ぶりに、世界理事にふじたあさやさんと懇請して立候補していただくことになった。

日本のこれまでの活動実績、とりわけアジアに対する活動実績から、私は上位当選は間違いないと思っている。強く確信している。

今回の「世界大会」は、ポランドとオーストリアが立候補していると聞く。中国が立候補を断念したのは残念である。韓国大会につき、2度目のアジアでの世界大会をと思っていただけに、である。

「フェスティバル」部門は、アシテジ世界大会史上、最高のフェスティバルになると予想される。北欧諸国のメンツにかけ

## 東日本大震災で被災された皆さんに

心からお見舞い申し上げます

て最高のもの(作品)を用意しているはずである。ましてや、北欧を代表するデンマークとスウェーデンである。期待にそぐわないはずはない。

従前から何度もこの紙面で見ているように、北欧は児童青少年演劇で世界を制覇、長年にわたり目論んできたところである。ある意味では長年にわたり

## 『日本の児童青少年演劇2011』

アシテジ日本センターでは、3年に1回の「世界大会」に合わせ、『日本の児童青少年演劇』を発行している。今回は『2011』年版を発行。

表紙は前回に続き、広島平和記念公園にある「原爆の子の像」。

「はじめに」には、従来の日本センターの主張、アジア諸国との友好をとりわけ大事にしていることに加え、今回は東日本大震災の影響が日本の児童青少年演劇に深刻な影響を与えるだろう、そして原発問題がさらにそれに加算されるだろう、ということを書き加えた。

青少年演劇国際会議」についても1ページ分を充当。団体会員・個人会員の紹介、アシテジ日本センターの歩み、世界のアシテジ・センター一欄表、世界大会年表等を載せている。さらに児演協の加盟団体の紹介も。A5判、54ページ。5月の「世界大会」に持参、世界各国に配布する。



### アシテジ日本センター

〈第30回定期総会〉のお知らせ

◆期日 二〇一一年6月5日(日) 午後1時30分

◆会場 国立オリンピック記念青少年総合センター

# 6団体共同で初の「東アジア」フェスティバルを開催

「2011東アジア児童青少年舞台芸術フェスティバルIN東京」

●7月23日～29日 ●オリンピックセンター他

アシテジ日本センターは、アシテジ日本センターは、昨年夏、大阪で、設立30周年記念事業として「2010アジア児童青少年演劇国際会議」を開催。会議では「アジアの団結」が謳われ、アジア諸国の団結と友好を深めることができた。

「IN東京」の開催は、7月23日(土)～29日(金)。会場は、国立オリンピック記念青少年総合センター／シアター1代官山／羽村市生涯学習センターゆとろぎ／渋谷区文化総合センター大和田さくらホールなどを予定している。

6団体共同でこうした「国際フェスティバル」を開くのは、初のこと。



▶中国『三人の和尚』



▶韓国『えふでのあらし』



▶ベトナム『水上人形劇』



▶カナダ『アメリカ白鶴のはなし』

## ▼アメリカ『ミュージカル インベンション』



・韓国(劇団ハタンセ)『えふでのあらし』

・ベトナム(ベトナム水上人形劇団)『ベトナム水上人形劇』

〈ゲスト参加〉

・アメリカ(リラビジョン)『ミュージカル インベンション』

・カナダ(緑の道化師劇場)『アメリカ白鶴のはなし』

〈共同制作〉

・日本(劇団影法師)／中国(唐山市皮影劇団)／韓国(劇団I)『西遊記』

・日本(劇団たんぽぽ)／中国(中国百花文化芸術有限公司)『赤ガラス大明神』

〈日本〉

・演劇集団遊玄社『音楽劇・イソップランドの動物たち』

・劇団ポプラ『ピーターパンとウエンディ』

入場料は、前売2千円、当日2千500円。

申し込み、TEL0422-54-6997、FAX042-2-54-6998。5月中旬には、リーフレットができるので、郵送する。

3年前から、アジテジ韓国センターは、アジアの若手俳優による協同作品を制作。今回は日本から真木雄治さんが参加。北朝鮮からの砲撃事件が勃発。参加5カ国のうち、3カ国が帰国したという。その後の涙ぐましい報告でもある。

## アジテジ韓国センター主催

## 「アジア協同制作公演」に参加して

# 無事、公演を終えることができました

演技集団 眞木雄治

「東アジア交流プログラム」この企画趣旨は異文化コミュニケーション、アジアの人たちが集まって一つの舞台を作りあげる。：のですが、いろいろな国の人たちが集まるので会話は主に英語です。そんな話を劇団代表から聞かされたのが9月の頭。「行くか?」「行きます」。

さて英語の勉強を始めましたが、やはり日常会話ができるレベルにまで到底：ああ出発の日が来てしまいました。もうドキドキです。あとはなんとかなるだろうとするしかない精神で行くことに。

10月。現地に集まったメンバーは中国、スリランカ、インド、台湾、パキスタン、韓国。恵まれたのは顔合わせした瞬間からメンバー同士打ち解けあい、実は初回のWSがみんなの壁を取

り払うという目的のWSだったのですがその時にはすでに壁は

なくみんな和気あいあい。良いスタートをされました。合宿場所ソウルから離れた「YUGU」にあるコリアンパフォーミングアートビレッジでの合宿生活でした。

一緒の場所での共同生活という事で毎日コミュニケーションをかねてWSをやったり片言ながらなんとか会話したり。僕は英語が喋れなく、分かる単語を並べてのジェスチャー会話だったのですが、メンバーは聞いてくれ、また、投げかけてくれ、それが優しくそして嬉しく思いました。「このメンバーなら良いものを創ることが出来る」そう思いました。人と人のコミュニケーションに国境はない。それを強く感じました。



合宿開始から最初の一カ月くらいは韓国の文化や民俗楽器を学んだり、韓国ASSEMBLYのイベントに参加したり。そのなかでどんな公演にするのかミティンクを重ね、「自分たちで台本を作成、このメンバーからこそその公演にしよう。楽しみながらやっつけよう」と決まりました。「一体感を持って」そう意気込み取り組む中、やがて大まかな台本が上がりキヤストも決定しました。何度も読み合わせをし、立ち稽古に移ったころ事件が起きました。

『11月23日』北朝鮮からの砲撃事件です。あとから知ったのですがこの事件は韓国国内よりも海外メディアが大々的に報道していたようです。僕らのいた町もソウル市内も実際はそんなに緊迫した情勢ではなく、むしろ日本からのメールやスカイ

プで大騒ぎだよと知ったくらいです。それでも各国から集まってきたメンバーには家族や親から連絡が入ります。心配して帰ってきたなさいと泣きだす家族：みんな精神的に辛くなっていきました。もちろん日本の僕の親からも。それでも僕はやり通すと親に伝えました。芝居がやりたくて韓国まで来たんだし何がどうあれやりたいと。

：結果3人が帰国。残ったのは役者2人とスタッフ2人。本番一カ月前：。大変でした。台本があるのに人がいなくて稽古ができない。メンバーも揃うか分からないのだから中止にするべきではないのか?そういう意見もできました。考えました。自分に何ができるのか。今なにをやらなきゃいけないかを。メンバーがいなくてもやれることはあるはずだ、と。

僕は残ったメンバーでアイデアを出しあい台本作りをすすめました。「こんな状況なのに残ってくれてありがとう。ユウジは強いね!」メンバーが僕に言ってくれました。やるだけのことはやりたい。それが僕らの思いでした。

そしてなんと韓国俳優やスタッフが参加。稽古が再開しました。それでも韓国の俳優さんは自分で仕事を持っていきます。スケジュール調整の中みんな稽古がなかなか進まないことに不安はありましたが、それでも一致団結し、やり通しました。



な稽古がなかなか進まないことに不安はありましたが、それでも一致団結し、やり通しました。

1月8日・9日の「ソウル冬季演劇祭」の、オープニング公演として『Why Why ma? Why』を上演。日本から、世界から沢山の人が集まる中、無事公演を終えることができました。

前述しましたが人と人に国境はなく例え言語というコミュニケーションツールが不十分でも通じあえるんだと実感します。今回出会えた仲間、そしてスタッフに僕は心からありがとうといたいんです。このプログラムに参加できて本当によかったです。日本では経験できないことが海外にはたくさんあります。これからの交流を広げてもっといろいろな経験をしたいです。またいろいろな仲間を増やしていきたいですね。

# アシテジ日本センターの歴史を振り返る⑭

## 「児童演劇史上最大の事業「佐渡大祭典」

### 石坂 慎二

(アシテジ日本センター事務局長)

前号で、1984年頃、日本の児童青少年演劇は、ただひたすら1985年の夏、佐渡島で開かれる「第1回全日本子どものための舞台芸術大祭典」に向かっていた、と書いた。

この「大祭典」は、日本の児童青少年演劇史にも大きく刻まれるイベントなので、歴史を振り返る意味で、アシテジの「国際シンポジウム」の前に、この「大祭典」について触れておく。この「大祭典」は、たしか1980年の全児演の総会で、風の子の本間整さんが提起したと記憶する。その提案に全児演がのり、徐々に各団体が加わって成立したものである。

1982年頃には、当時劇団2月の永田靖夫さんが事務局長に就任し、東京に在住、盛んに活動を開始していたと思う。

前年の1984年頃は、まさしく「佐渡大祭典」一辺倒で、表現は悪いが、猫も杓子も「大祭典」、関係者が集まれば、そのことしか話が出なかつた感が

ある。アシテジ日本センターももちろん例外ではなかつた（機関紙『アシテジ』がでなかつたのも、忙しくて機関紙の編集どころではなかつた、ということもある）。

実行委員会は、(社)日本児童演劇協会／日本児童演劇・劇団協議会／全国児童・青少年演劇協議会／日本青少年音楽団体協議会／全国子ども劇場おやこ劇場協議会／(社)日本芸能実演家団体協議会の6団体で構成。各団体が総力を挙げての空前絶後といえる取り組みであった。

### 歌右衛門さんの『隅田川』

特に芸団協にあつては、私たちの強い要望に応え、会長の中村歌右衛門さんを「大祭典名誉会長」として出していた。さらに歌右衛門さんの歌舞伎

『隅田川』まで提供いただいた。「大祭典」は85年8月19日から23日までの5日間、佐渡10市町村で繰り広げられ、歌右衛門

▲歌舞伎「隅田川」右・中村歌右衛門、左・中村福助



さんの歌舞伎『隅田川』は、21日、両津市民会館で公演された。島民から熱狂的に歓迎を受けたものである。

以下、しばらく、余談。私はこの公演の会場整理係りの責任者として命を受けた。

開演は午後2時。なのに朝早くから、島内のおじいちゃん、おばあちゃんが集まってこられた。まだ真夏、陽ざしも強い。会場整理係りとしては、日射病なんかで倒れたりしてはかたわらない。どうするか。会館の外で、入口から列になつている方々を日蔭にまず誘導する。そして、座れるところを用意する。開場を早める準備をする。そしてようやく開場。入り口で押し合わないように、少しずつゆ

っくりと入ってもらう。両手を大きく広げ、まさしく身体を張って、怪我がないように、どうにか開演までこぎつけた、という記憶がある。

ムには記載されていないので、後から追加したらしい。②「国内シンポジウム」(1回)③その他、団体主催による「会議」(3団体、6か所)Ⅲ、生活学校

### 膨大なプログラムを用意

この「大祭典」とはなんだつたのか、振り返る意味で、まずその概要を述べてみる。

I、舞台上演(出演団体65団体、

内舞台劇32、人形劇9、影絵5、音楽15、古典4)

①「巡回公演」、島内10市町村で、69公演。

②「特別記念公演」、新星日響+鼓童合同公演ほか、7公演。

③「小型作品連続公演」、20作品。

④「アマチュア公演」、7公演。

⑤「野外劇場公演」、6作品。

⑥「老人ホーム公演」、1公演。

Ⅱ、会議・シンポジウム

①「国際会議」(2回)

※『記録集』に2回とある。あれ?と思つて調べてみたら、「国際シンポジウム」の他に「環太平洋会議」とある。これは多田徹さんやしかたしんさんたちの「児童劇作家会議」が開いたものである。当初のプログラ

「地引き網教室」「わら細工教室」「おけさ教室」「切り絵教室」といった、今でいう「生活体験学習」である。90種類以上のプログラムが開された。

その他、開閉会式、大交流会など、大規模な式典・祭典が行なわれた。

今では、到底考えられないプログラムである。

私は、「大祭典」後の赤字の処理問題で、苦労した経緯もあり、正直いってあまり思い出したくもなかつた感があるが、この機会を得て振り返ってみて、そのあまりにも膨大な量に、今更圧倒されてしまった。

よくやったものである。またよくやったものである。これも一朝一夕ではなく、各団体が総力を挙げて少しずつ積み上げたものであった。

【編集委員】石坂慎二、上保節子、菊田朋義、林陽一、ふじたあさや